

4) 理由を問う

- ◆「 と言えるのはなぜか」「どうして か」など、理由を問う問題である。次の手順で考えよう。
- ・「下線部」を含む文をよく見る。
 - ・前後の文から「理由を示す」表現を探す。

★例題9 問いに対する答えとして最もよいものを一つ選びなさい。

水中では、体重が10分の1ほどになる。水泳がほかのスポーツと決定的に異なっているのは、体の特定部位、たとえばひざなどに体重が集中しないことである。かつ運動量を自在に加減できるという点も大きなメリット(注1)で、その気になれば短時間でエネルギーを消費することも簡単にできてしまう。

もう一つ、意外な効果がある。水中では体温を保つために体内のエネルギーを燃焼させる仕組みが自然に働くことから、知らずに大量のエネルギーを消費していることになる。つまり①何もしなくとも水中ではカロリーを消費するのである。

(岡田正彦『人はなぜ太るのか—肥満を科学する』岩波書店)

(注1)メリット：いい点、長所

問い ①何もしなくとも水中ではカロリーを消費するのであるとあるが、それはなぜか。

- 1 水中で体温を保つためのエネルギーが消費されているから。
- 2 水中では体内のエネルギーを効率的に使う仕組みが働くから。
- 3 水中では運動量も消費エネルギーも自在に加減できるから。
- 4 水中では体重が軽く、体の特定部位に体重が集中しないから。

ステップ1 本文を読んで全体をつかもう

キーワード：水中、スポーツ、メリット、エネルギー、効果、消費

第2段落のはじめ：「もう一つ、意外な効果がある」

第1段落と第2段落は、それぞれ違う効果について述べている？

→テーマは、水中でのスポーツの効果？

ステップ2 問いを見て本文から答えを探そう

1) 「下線部」を含む文をよく見る

つまり①何もしなくとも水中ではカロリーを消費するのである。

言い換え

2) さかのぼって「言い換え」を見る

「理由を示す表現」に注目して、「下線部」の理由を探す。

理由

水中では体温を保つために…エネルギーを燃焼させる仕組みが自然に働く ことから、
知らずに大量のエネルギーを消費していることになる。

つまり①何もしなくとも水中ではカロリーを消費するのである。

「水中では体温を保つために…エネルギーを燃焼させる仕組みが自然に働く」が「下線部」の理由である。

ステップ3 選択肢と比べよう

1: 正解

2: 効率的に使う仕組みについては書かれていない。

3: 消費エネルギーを自在に加減できることは、「何もしなくとも…カロリーを消費する」とことは別のメリットである。

4: 特定部位に体重が集中しないことは水中での運動のメリットではあるが、「カロリーを消費する」理由ではない。

4) 理由を問う

◆理由を問う問題で、「下線部」に直接つながる「理由を示す表現」が見つからないこともある。

その場合は、「下線部」の言葉の「言い換え」や「対比」になる言葉に注目して、文章の流れから理由を探そう。

★例題10 問いに対する答えとして最もよいものを一つ選びなさい。

動物進化には「進化の二大車輪」と言われるものがあります。一つは有名な「自然選択」。環境の変化にうまく適応した動物だけが生き残るといふものです。もうひとつが、あまり知られていませんが「性選択」。なぜ孔雀の羽根は美しくなったのかというと、環境に適応したからではなく、メスが美しい羽根を持ったオスを選び、そういうオスの子を生み続けたからです。人間もこれとよく似ていて「文化進化の性選択」がなされます。

女の子がどういふ男の子を好むかによって、実は男の子の生き方が大きく方向づけられ、それが将来的には一国の文化を形成することになります。女の子たちが昔から生きてきた、そして最近になって男の子に対しても強く望むようになった「コミュニケーション志向」は、戦いによる上昇や支配をめざす「コントロール志向」と違って、殺人や傷害に結びつかず、その意味で成熟社会にふさわしいものです。①女の子の役割はものすごく大きいのです。

(宮台真司「意味なき世界をどう生きるか?」『人生の教科書 [よのなか]』筑摩書房)

問い ①女の子の役割はものすごく大きいのはなぜか。

- 1 女の子は環境に適応することが上手で、どんな変化にも適応できるから。
- 2 女の子がどういふ男の子を好むかが、国の文化を方向づけることになるから。
- 3 最近の女の子が成熟社会にふさわしい志向を持つようになったから。
- 4 男の子より女の子のほうがコミュニケーション能力が高く、現代社会に適しているから。



ステップ1 本文を読んで全体をつかもう

キーワード：進化、メス、オス、「文化進化の性選択」、女の子、男の子

「対比」に注目する

- ・動物の進化：「進化の二大車輪」=①自然選択
②性選択(=メスがオスを選ぶことで進化)
- ・人間：「文化進化の性選択」
→ テーマは、進化と性の関係?

ステップ2 問いを見て本文から答えを探そう

「女の子の役割」が「大きい」理由を探す

「理由を示す表現」がないので、言い換えなどに注目して文章を追っていく。

女の子がどういふ男の子を好むかによって、(=女の子の役割)
 実は男の子の生き方が大きく方向づけられ、
 ↓
 それが将来的には一国の文化を形成することになります。(=大きい結果)

つまり、女の子の役割が大きいのは、それが国の文化を形成することになるからである。

ステップ3 選択肢と比べよう

- 1 女の子は環境に適応するのが上手だとは書かれていない。
- 2 正解
- 3 成熟社会にふさわしい「コミュニケーション志向」は、女の子の昔からの志向である。
- 4 コミュニケーション能力に男女差があるからではない。



練習32 問いに対する答えとして最もよいものを一つ選びなさい。

故寺田寅彦氏の有名な指摘に「①学者は馬鹿でなければならない」というのがある。頭が良い人は何か新しい研究を始めようと思っても、その前途にある困難さや障害や行き詰まりが見えてしまう。そこで成果が挙がるはずがない研究などは、やる気になれない。しかし、手前からはどう見ても行き詰まりになっているはずの道でも、そこまで行くとふいと右へ行く道がついているのを発見したりするように、どんな賢い人間でもやって見ないとわからぬところが多いものだ。

(会田雄次『日本人材論 指導者の条件』講談社)

問い ①学者は馬鹿でなければならないのはなぜか。

- 1 頭が良い人は、いつも研究のことしか考えていないから。
- 2 頭が良い人は、困難や障害を克服することができないから。
- 3 頭が良い人の予測力は、新しい研究をする上で妨げとなるから。
- 4 頭が良い人の研究方法では、どうしても行き詰まってしまうから。



練習33 問いに対する答えとして最もよいものを一つ選びなさい。

疲労には二つの顔がある。悪玉疲労と善玉疲労である。疲れてくると作業能力は低下し、気持ちはいら立ってくる。疲れがたまれば食欲不振や睡眠不足になり、ひいては病的状態に陥ることがある。これが疲労の悪玉たる所以^(注1)である。

今日の省力化や機械化の作業環境は、悪玉疲労から逃れる方策として生まれてきたものといえる。ところが高度に機械化された社会では、人間は単純で動きのない作業に従事し、精神的な緊張だけが求められる労働条件におかれている。そのために精神的な疲労が主役としてスポットライトをあびるようになってきた。筋肉労働が中心であったころには筋肉の疲労が主役であったが、今日では①精神の疲労に主役が交代したのである。疲労は、いつの時代にも姿や型をかえて登場してくるのである。

(矢部京之助『疲労と体力の科学 健康づくりのための上手な疲れ方』講談社)

(注1) 所以：わけ、理由

問い ①精神の疲労に主役が交代したのはなぜか。

- 1 今日では人間は善玉疲労より悪玉疲労のほうを多く経験するから。
- 2 省力化や機械化を進めた結果、人間は悪玉疲労から逃れられたから。
- 3 機械化により、単純で動きの少ない作業が中心になって筋肉の疲労が減ったから。
- 4 かつて中心であった筋肉疲労に加えて、今日では精神的な疲労が加わってきたから。

練習34 問いに対する答えとして最もよいものを一つ選びなさい。

植物細胞は細胞壁で囲まれている、①このことの意味は大きい。

動物細胞の外壁は、弱くて薄い原形質膜である。

たとえて言うならば、植物細胞は紙パック入りの牛乳のように、容器が堅い。動物細胞は、ビニール袋入りの牛乳のように容器がやわらかい。

紙パック入り牛乳は堅いのでいくつも積みあげてしっかりした壁を作ることも可能だ。だが、ビニール袋入り牛乳を積みあげることはできないであろう。

だから、多くの動物は体の中に骨を持ち、骨格というものを有するのである。骨格で体の基本形を作り、そこにやわらかい肉をつけて、体が成り立っている。(中略)

言いかえれば、植物には骨がないのに、どうしてあんなに大きく(ものによっては数十メートルの高さにまでなる)なって体がつぶれないかという、細胞が細胞壁で囲まれているからなのである。

(清水義範『もっとおもしろくても理科』講談社)

問い ①このことの意味は大きいとあるが、なぜか。

- 1 植物細胞のおかげで、細胞壁が生まれたから。
- 2 細胞壁のおかげで、植物は大きく成長できるから。
- 3 細胞壁によって、堅い細胞がやわらかくなるから。
- 4 細胞壁があることによって、動物は骨を持つようになったから。

練習35 問いに対する答えとして最もよいものを一つ選びなさい。

金沢の兼六園で①白鳥におどろかされたのは十年以上前のことである。

友人と三人で能登半島めぐりをやり、金沢にも立ち寄った。

このときのことは、ほかにも書いたが、兼六園の池のほとりでお弁当を食べているときに、大きな白鳥が泳ぎながら、上陸して、ガガ、ググと、品の悪い声を上げて、餌をよこせと催促する。

知らん顔をして食べていると、^{くちし}嘴で私たちの^{ひざこぞう}膝小僧を突つく。

痛いしうるさいので、食べかけをほうってやると、飛びつくようにして食べる。

エビの尻^しっぽ。お多福豆の皮。投げてやって食べないものはひとつもなかった。

その食べかたの品のないこととまったく思ってみるせいか、顔つきにも品というものが無い。目つきも鋭い。何よりびっくりしたことは、上半身は、たしかに美しくバレリーナの^{ごと}如く優雅なのだが、下半身は労働者もかくやというほど、妙にたくましいことである。

食べ終わってもキョロキョロとあたりを見廻し、二、三度、私たちの膝小僧を突つき、もう無いと見るや、池にもどっていった。

スーと音もなく水面を滑ってゆく姿は、まぎれもなく美しい白鳥で、私はその二重人格(?)に感心して眺めていた。

(向田邦子『女の人差し指』文藝春秋)

問い 筆者が①白鳥におどろかされたのはなぜか。

- 1 一見すると優雅なのに、下半身はたくましく、行動にも品がなかったから。
- 2 労働者のような下半身をしているのに、音もなく泳ぐことができたから。
- 3 水鳥なのに、人間の食べ物を欲しがって、わざわざ上陸してきたから。
- 4 こちらが知らん顔をしているのに、乱暴にしつこく餌をねだったから。